



TITLE:

統計拾穂抄(三)

AUTHOR(S):

財部, 静治

CITATION:

財部, 静治. 統計拾穂抄(三). 經濟論叢 1925, 21(2): 278-282

ISSUE DATE:

1925-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128306>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 二 號 卷 一 十 二 第

大正四年八月一日發行

論 叢

商書周書

に見はれたる政治經濟思想

法學博士

田島 錦治

公益上の免稅

法學博士

神戸 正雄

運賃論より見たる 繫船同盟と海運同盟

法學士

小島昌太郎

自殺統計論

法學博士

財部 靜治

說 苑

徳川時代岡山江戸間の海運

經濟學士

黒 正 巖

リカアドに於ける勞働價值法則の妥當性に就いて

經濟學士

森 耕二 郎

雜 錄

近世農村の性質

經濟學博士

本庄榮治郎

社會統計てふ名目の意義

法學學士

財部 靜治

手形交換制度の先驅としての 里昂のペーマン

經濟學士

小川福太郎

物價の變動と從量稅

法學士

汐見 三 郎

法 令

漁業共 施設獎勵規則・漁業財團抵當登記取扱手續・職業紹介法施行令中の改正・關東州の生産に係る物品の輸入税の免除に關する法律・國有林野火防組合規程・預金部預金を郵便貯金に振替の件

（禁 轉 載）

統計拾穗抄 (三)

財部 靜治

六 社會統計てふ名目の意義

獨逸に於て普通に行はるゝが如き實質的統計學全部が、社會的生現の精微研究を、その職分とする程度に於ては、取りも直さず社會統計論たり、その意義によれば之を自然科學的統計論に對立せしめ得べく、從ひて人口統計論、經濟統計論等の諸部門と、並立せしむべきにあらず。されど獨逸に於ける同語の用法は決して一定せりとするを得ず、諸學者により種々に觀想せられたり、以下その一斑を釋ねんと欲する者なりと雖も、その以前に尙開化統計 Kulturstatistik てふ語も、時として別に使用せらるゝことを注

意すべし、而して同語中に多くは教化及教育統計を解するも、部分的には又假令は F. Zahn の編纂に係る獨逸統計學全書 Die Statistik in Deutschland, 1911 の如く、之を人口統計、經濟及社會統計の二部に對立せしめ、右の二種統計以外實に私法統計、道德統計、競技統計のみならず、軍事統計、選舉統計、財政統計迄も、包含せしめたるの例ありとす。(尙本誌第十八卷一〇一八頁參照)

社會統計てふ語は Gottlieb Schnapper-Arndt によれば、右の如き最廣義に觀想せられ、その激勵的措辭に富めるも、多少の誤謬をも宿せる講義に本づく遺著は、恰も「社會統計論」(一九〇〇年)と題し、別に人口統計論、經濟統計論(就中私經濟統計論と題せる、家計統計の説明を特に注意すべし。尙拙著論網六四〇及六四二頁參照)及道德統計論講義と附記せり。Sigmund Schott, Statistik, 1913 (特二一〇八頁以下)も同様に社會統計論中に、社會大量現象の研究を總括せり。されど社會統計論と謂ひて、一層狹き概念を附與するは寧ろ普通な

り、その間諸學者は種々の意義を附與したり、即ち假令は G. v. Mayr は生物學觀に立脚すべき人口統計論を、總稱としての社會統計論に對立せしめ、后者中に人口統計論以外の諸種統計論、即ち道德統計論、教化統計論、經濟統計論及政治統計論を包括せしめたり、(特に Theoretische Statistik, 2. Aufl. S. 207 參照) 然るに Heinrich Bleicher, Statistik, I, 15 S. 15 は恰も之に反對に、人口統計論を狹義社會統計論と呼びて、極めて廣き範圍を與へ、之に經濟統計論、行政統計論及自然統計論を對立せしめたり。(本誌第十八卷一〇二九頁參照) かくて右兩著者にありては、社會統計論は既に承認せらるゝ部門の別名に外ならざるも、v. Janna-Sternegg は統計學の系統中に、「社會統計論」てふ一の特別部門を作るべしと提案し、そは社會秩序のために基本的たるべき諸事實、假令は婚姻及家族、地域團體、住居地、集積歩合、故郷、國民籍、内外移住、信教、國民性、分限、階級及職業等の全複合を問ふべきものとせり。(Zur Kritik der Moralsstatistik, 1907 Neue Probleme

des modernen Kulturlebens, S. 305) 而して夙に Haus-hofer, Statistik が人口統計論、經濟統計論、道德統計論の三編に對立すべき、一編に「社會及政治生活」と題し、(1)人口の住所、(2)婚姻及家族、(3)國民及國家の三章に分ち説明せる故智には、右の見解と通する點あるを想はずんば非ず。次に Carl v. Tyska, Statistik, II, 1. 1924 S. 20. は實質的統計學の別名たる廣義社會統計論以外に、狹義の社會統計論を認め、その中には諸社會事情及諸社會關係の影響が、特に明かに顯現さるべき統計的範圍を總括し得べしとし、特に人口統計論及道德統計論は、殆んど皆その中に包括さるべく、經濟統計論の大部分は之より除外さるべしとせるも、その範圍の限定上曖昧の嫌なしとせず。之に比し要領を得たるは Ferd. Schmid (Über Begriff und Umfang der Sozialstatistik, St. Monatschrift, 1915, S. 350 ff. Vgl. auch Zimmermann, Sozialst. im Handwörterb. d. Sozialen Hygiene II). の所説なり、即ち氏は實質的意義によれる統計學的研究に於ける、從來の諸研究範圍

と共に、是等のもの特に經濟統計論より、特定の部分を援取るべき、特別部門としての社會統計論を加へんとせり、詳言すれば社會統計論の職分は、社會的分層事情、社會的團體、及社會的勢力方便(特に組合制及出版物)の研究に存すべしとせり。最近にありては Wilhelm Winkler, Statistik, 1925 S. 150 も類似の見解を吐露し、社會統計論は經濟的諸力の角逐上、特に所得の分配上、順況ならざる群衆及その經濟事情の統計なりとせり。

右最後に掲げたる二説は注目すべき點あるを以て、今少しく評論する所あらんか、一般社會統計論以外に狹義社會統計を認むるは差支なからん、されど實際統計學の普通部門と、並立すべき一部門とはなし得ざるに似たり、夫れ社會問題、社會改良、社會政策等の諸語に、組合はさるゝが如き「社會」てふ語に、全く特定せる意義を伴はしむる、獨逸の普通用語例には異議を唱へず、その際社會と謂へるものは、常に現存せる人々として社會的に分化せられ、諸社會階級

に分たるゝものを考ふとするを得べし、從ひて又その用法に倣はんか、社會統計と言ひつゝ、それは社會的分層事情(個別社會階級及群の大小)又は個別社會階級の特色を、表章すべき統計の一切を指すとなし得べし、されどその研究にありては、第一に人口統計又は經濟統計又は教化統計等に屬すべき材料、第二次に社會統計的色彩を帶べる材料を取扱ふことゝならん、蓋し吾人が社會階級を分つの標準たらしめ得べき特徴は「社會的それ自體」に非ず、寧ろ假令ば經濟的相違(財産、所得、土地所有等の相違)又は教化の相違なればなり、されど又吾人は種々の人口統計 道德統計、經濟統計の研究上、之を社會階級別に分つことゝし、諸社會階級の特質、假令ば出生の頻繁度合、犯罪數、消費、住居事情等の特質を、尋ぬることゝなし得べし、從ひて吾人は統計學の各部門一切につき、社會統計的性質を帶べる材料を、之を缺ける材料と共に發見せん、かくてかゝる社會統計的材料を、その前後の聯絡より引離し、依りて特別の獨立せる一編とし

ての、「社會統計論」を分立せしむること不可能にはあらざるも、吾人は之を欲せず、寧ろ反對に一切の統計的研究を、出来るだけ社會統計的に延ばさしめ、是等に改良を加へ、依りて之がため社會分層事情及諸社會階級の特質につき、啓發する所あるを得せしむるは、方法論上の一般要求と呼べるゝの要あり、事實上此方面に於て、益々新しき進歩は達せらる。

之と共に社會統計面に刷新するの、二方法は考へらる。

(1) 普通調査の刷新

此方針により特殊社會階級の大きに關する、知見の收得に努め得べし、假令は職業調査は職業上の社會的地位を問ひ（獨立者又は使用人又は勞働者、更にその以下の細別）經營統計は經營に於ける地位の察取により刷新されたり、他面諸社會階級の特質の調査に努め得べし、即ち出生及死亡統計、刑事統計、住居統計、消費統計は、福祉階級別及職業別として分たれ得べし、かゝる普通調査の更張によらんか、個別の階級間に比較を

遂げしめ得べき長所を伴ふ、福祉階級別に出生の多少を問ふが如きは然り。

(2) 個別特定の社會的群に關する特別調査

その大さ及特質につきて然り、假令は特定部類の勞働者（その大さ、生活及勞働事情）官公吏に關する特別調査の如し、世には又窮民に關する特別調査あり、貯金庫統計は貯金庫預け人より成る、社會的特別群の社會統計に、土地所有統計は地主社會統計に取擴ぐるを得べし、家畜統計によりては家畜所有者の群を表明することゝなし得べく、産業組合統計によりては、人口中かゝる組合を結べる分子として、同時に又特殊の特別群視し得べきものを示し得べし、かゝる特別調査は諸群間に於ける、比較の可能を授けざるも、時としてはその討究を甚だ精細ならしめ得べし。（本項の骨子は *Žizak, Grundriss d. St. z. Aufl.* 65, 226, 227 に據る）

體自給自足的經濟を營みしものであつた。即ち食物は勿論、衣服農具其他大概の必要品は村内に於て供給されたものであつたと思はれる。